

特別講演 2

「視神経脊髄炎の病態・診断・最新治療」

河北総合病院 神経内科副部長

荒木 学 先生

視神経脊髄炎は自己免疫疾患の一種であり、主に、脳や脊髄、視神経に炎症が起こるのがこの病気の特徴です。初期症状としては視神経では眼痛や視力低下や視野狭窄、脊髄では背部の痛みや手足や体のしびれ、脳神経では吃逆等があります。

世界では10万人あたり0.5人～5人と言われており、日本では2012年の疫学調査の結果、10万人あたり3.42人という結果が出ています。

最初の発作で思い症状が現れることが多く、数時間から数日間で急激に進行します。一旦症状が落ち着いた後、無治療の場合は年に1～1.5回の頻度で再発すると言われています。1回の再発で失明や歩行障害などの症状が残る事もあり、繰り返すと、後遺症が増え重症度が進みます。できるだけ早く、神経内科などの専門医、または入院治療ができる眼科を受診し、再発予防の治療介入が必要になります。

今回は本疾患の概念と疫学、臨床症状、病態とIL-6との関わり、最新の再発予防治療等、に関してお話させていただきます。